

Tommo と「人間の墮落」

—Herman Melville の *Typee*—

平野温美*

(昭和62年4月30日受理)

Tommo and the Fall of Man: Melville's *Typee*

by Harumi HIRANO

Typee is not a mere travelogue but has a symbolically created theme. The argument of this paper is that Melville is telling an allegory of the Fall of Man through the pilgrimage of the narrator from the corrupt civilized world to the innocent *Typee* and also through the change of peaceful *Typees* to ferocious savages.

Typee は紀行文として出版されたが¹⁾、今世紀に入り、例えば Charles Roberts Anderson による実際の Melville の体験と作品、及び参考文献等の詳しい比較対照の研究²⁾ などを経て、今日では “*Typee* is a symbolically created thematic construct.”³⁾ ということが定着している。言いかえると *Typee* は西洋文明社会から未開野蛮社会への symbolical な旅の物語である。

これまでの *Typee* 批評を辿り、論点を明らかにしてみたい。出版以来殆どが認めてきたのは「楽園」としての *Typee* 谷である。作品の魅力は “the gorgeous beauty of this southern paradise”⁴⁾ であり、またタイピーの “a whole system of innocence and peace”⁵⁾ であった。*Typee* は “Eden is real”⁶⁾ という印象を与えてきたのである。しかし問題は、Hawthorne も指摘したように、それとは正反対に、タイピー人の凶暴性が作中繰り返し言及されることと、主人公が最終章で獐猛なタイピー人から命がけの脱出をした点である⁷⁾。タイピー人は従って二つの矛盾する顔を持って現われる。ひとつは無垢で陽気な楽園の住民の顔、ひとつは恐怖と策略を隠し持つ蛮人の顔である。

Typee が象徴的な主題を有する作品であると早くから見抜いたのは D. H. Lawrence で、彼の解釈はその後の批評の流れを決定したといえる。彼は、タイピーは確かに Melville が探し求めた “paradise” であったが、文明人が過去の真空状態のようなその地点に戻ることは最早不可能であること (“We can't go back to the savages: not a stride.”⁸⁾) の悲劇性を指摘した。F. O. Matthiessen にとってもタイピーは “a primitive state of innocence in which

* 北見工業大学一般教育等人文

developing mankind may not remain.”⁹⁾であった。その後の批評は、楽園である筈のタイピーが決して理想的な世界ではないこと (“Eden’s Failure”¹⁰⁾) の証明を試み、主人公の脱出及び文明世界回帰は彼の精神的あるいは肉体的成長の象徴的行為であるとする、いわば “Fortunate Fall” の考えが主流である¹¹⁾。

しかし主人公にそういった自己認識や成長があるだろうか。筆者は疑問に思う。この解釈は主人公と作者が同一あるいは近い関係であるとの前提で、谷を脱出した理由を作品を越えたところで探していると思われる。この考え方に無理があると指摘したのは、筆者が知る限りでは T. J. Scorza だけで¹²⁾、彼によると Melville は西洋知性を “questionable apple of knowledge” と見做し、作品は西洋的 “brain” に対するタイピーの “heart” の優位、言葉をかえると “Poetry is superior to History” を表明したものである。筆者も大筋で同感である。しかし Scorza も含め、主人公の人物像の分析と、矛盾するタイピー人の理由を求める試みは、何か殆どなされていない。ただ William B. Dillingham が、「当時」の主人公と「現在」の主人公の視点の違いと、それによる二つのタイピー観を指摘しているぐらいである¹³⁾。本稿では主人公を作者と離れた独自の存在として検討し、彼とタイピーとの関係、そしてタイピー人の変化の理由を探りながら、旅の真の意味を改めて考察してみたい。

先にここで筆者の結論を述べると、Melville が処女作で描いたのは、むしろ “Unfortunate” な「人間の墮落」の寓話ではなかったか、ということである。執筆当時の彼は既に Rousseau の影響をかなり受けていたと思われるが¹⁴⁾、この作品と特に繋りが深い『人間不平等起原論』は¹⁵⁾、自然人を想起することから始まり、18世紀フランスの専制主義までを再現することで、文明化に伴い人類の墮落と不平等の歴史が生れたことを述べたものである。Melville は *Typee* でこの逆の方向、現代文明を出て未開野蛮社会を訪れる旅の紀行文を装いながら、やはり同様に理性及び知性の墮落による楽園の喪失と、無垢なるものへの憧れをテーマに書いたのではないか。更にそこに関与するのがタイピー人にとっての楽園喪失であるというのが筆者の考えである。以上のことが主人公とその旅、そして相矛盾するタイピー像に深く絡がっていると思われるのである。以下、物語を順を追って辿りながらこのことを述べてみたい。

I

主人公の旅は Dolly 号、Nukuheva 島山中、そしてタイピー谷という三つの場面を通過することから成る。三つの世界の間には鋭い断切があり、互いに交流することのない閉じられた空間である。また作品は表面では四か月あまりの旅を順に追った旅行記であるが、その表層を披剥すると、そこには現実世界から、時空を越えた神話的世界への遍歴の物語が露わになる。作品を解く鍵は、主人公が遍歴を通じて自己の identity を求めてゆくというより、むしろ逆に彼の identity が分解し変質すること、言易えると彼が転身 ‘self-transformation’ をしつつ世界を巡ることを拘え、そして繋ぐことと思われる。

Narrator でもある主人公は、まずは捕鯨船 Dolly 号に乗る一介の水夫だが、船の食生活の現状を語ることから始めて、そこが物質的、社会的に危機に陥っていることを語る。老朽化した船は半年も陸地を見ることなく海を漂い、船内では新鮮な食物は食べ尽されてしまった。自然なものの生命感があるものは見当らず、生きた草の葉一枚の緑であってもそれを渴望する主人公の眼に映るのは、不快な病んだ色あいを見せる舷牆の内側の人工的な緑色の塗装である。船の社会生活も同様に危機的で、文明社会の原則であるべき“law and equity”(211)の精神は、船長が一方的に契約事項を踏みにじることで、すっかりないがしろにされている。船員はただひたすら船長の専制に耐えるだけで、反乱を起すことも出来ない。Rousseau 流に言えば、これは社会の不平等の最終段階である、絶対者と奴隷の關係に墮ちてしまった状況であろう¹⁶⁾。船は其上、未来への展望や希望からも閉ざされたことを示すように、徒に海をさ迷うばかりである。

船を脱走するに際し、主人公はその行為を正当化するため法的議論を展開する。もし契約の当事者の一方が責務の履行を怠るならば、片方も責務を免除されるのは当然ではないかと。また更にいかに耐えがたい状況であるかを縷々と述べ、恰も Jefferson の「アメリカ独立宣言」を思わせる理由によって、Dolly 号という社会に対したったひとりの反乱、すなわち脱走の正当性を主張する。しかし Melville は主人公の脱走は別の次元のものであることを、コミカルな調子であるが、死と再生の儀式によって暗示する。船長が船の最後の新鮮な食肉となった片脚の雄鶏 Pedro を食べてしまうことで、船はようやく島へ向かうことになるからだ。主人公は Pedro を擬人化し、次のように呼びかける。

I wish thee no harm, Peter; but as thou art doomed, sooner or later, to meet the fate of all thy race; and if putting a period to thy existence is to be the signal for our deliverance, why—truth to speak—I wish thy throat cut this very moment; for, oh! how I wish to see the living earth again! (4)

いわば最後の命あるものが、船長の船における“last supper”¹⁷⁾で、彼の cannibalism の犠牲になることによって、主人公は現状を脱し生きている大地へ行くことが出来る。船をマルケサス諸島へ向けると決った瞬間に主人公の胸に湧き起る異国への憧憬、そしてそこが未だ文明もキリスト教も拒み続けている未開社会であることは、Dolly 号が単なる捕鯨船ではなく、これから赴く世界の対極に当るもの、すなわち未開野蛮に対する西洋文明社会そのものを表わすことになるのは勿論である。雄鶏 Pedro の運命は、島の野蛮な慣習として非難されるカニバリズムが、本当は形を変え文明社会の構造となっていることのアイロニカルな伝達であろう。また再生のための犠牲の鶏に、明らかに Christian name を付けたことも暗示的な意味を担っている。それは当時の南海の島々で行われていた教会の不毛な布教活動に対する Melville の随所でなされる批判と呼応し¹⁸⁾、主人公がキリスト教社会と訣別することを暗に伝えるからである。彼はこうして西洋文明社会からの出奔を宣言し、腐敗した世界を葬り捨て、生命が盈溢

する原初的世界へ向う巡礼者となってゆく。

II

こうして主人公は現実世界から次に神話的世界へ向うが、Melville は彼をまっすぐに「地上楽園」に到らせたのではない。これから始まるのは主人公自身の死と再生のドラマで、彼はここで暗く深い死の世界、すなわち Dante が通過した「地獄」及び「煉獄」に相当する世界へ踏みこんでゆく。それが Nukuheva 島山中の彷徨と、タイピー谷への降下の旅である。船から見ると島はひとつの「生きている大地」であったが、その島には予期しなかった闇部があったことになる。旅の出発点で主人公と、共に行動する Toby の行く手に小川があり、まず Toby が先立って“a young roe” (37) の如く飛び越えるが、これで死出の川 Acheron を渡ったことになろう。直後に Melville は二人を「鉄格子」のような繁みに閉じ込め、方向を奪ってしまうが、それはいわば作者が仕掛ける「罨」に落としたのである。以後主人公は一介の水夫ではなく、さまざまな時制とさまざまな世界を巡る存在に仕立てられてゆく。彼を待つのは自分の意志や期待とは関わりなく、作者が行く手を示す巡礼の旅途で、自己の存在の何たるかが試され証明される運命である。基底にあるのは創世期の寓話の再現である。

繁みを抜け出た二人は、今度は四つん這いになって、草の間を“a couple of serpents” (39) のように縫いながら山を登ってゆくが、行き先は天地創造以来生きものが住んだ例のない、暗闇が支配する場所である。殊に主人公にとっては、そこは飢え、寒さ、乾き、悪感、脚の痛みなどが次々と襲う、文字通り“infernal place” (47) であった。この山中で過す夜には従って異様な不気味さが漂うことになる。

I have had many a ducking in the course of my life, and in general cared little about it; but the accumulated horrors of that night, the deathlike coldness of the place, the appalling darkness and the dismal sense of our forlorn condition, almost *unmanned me*. (イタリックは筆者, 46)

“A couple of serpents” と結びつくと、“unman” は「意気沮喪させる」という意味ではなく、「人間らしさを奪う」ことの意を帯び、その通りに主人公は現実の人物から象徴的な意味を体现する存在へと変化する。その決定的な刻印と言えるものが、“some venomous reptile” (48) に咬まれたかのような不思議な脚の痛みである。だから直後に彼が太陽に輝く“gardens of Paradise” (49) のように美しい谷を眼下に隙間見るのは、勿論偶然ではない。

脚の痛みは谷の生活でその現象は具体的になるが、Melville は主人公と Toby を対照的に描くことで、痛みの起因の象徴的意味を示唆する。二人を明らかに“mind”と“body”の役割に分化して描くのがそれで、例えば船の脱走を始めあらゆる場面で行動を指示するのが主人公、指示に従い先に行動を起すのが Toby という工合である。主人公は旺盛な好奇心の持主で、物事の推測、立証、決定など論理的、知的な役割と病んだ肉体をその特徴とし、一方 Toby

は、身の動きに野生の鳥や獣が比喩として用いられる通り、健康な動物的肉体と本能的な行動原理を表わす。二人の相違が鮮明になるのは、谷へ降りる決定に至る経過であろう。まず Toby は食物と快樂への誘惑から直ちに降りることを主張するが、主人公はその思慮のない考えに反対し、安全性の確認の必要を説く。そして彼の指示で別の谷を求めて山中の探索を続けるのだが、この暗い山中における主人公の判断は、ことごとく失敗に終るのである。いわば彼本来の「狡しさ」は、何者かの力によって奪い取られたかのように、ついに彼は次の指示が出せなくなってしまふのである。それに対し Toby は、“a young bird” (55) の如く楽し気で元気よく、隙間見た美しい谷へ降りることを決めると、途方に暮れる主人公を従え降りてゆくことになる。Dante の地上楽園は煉獄山の山頂に位置し、Milton も楽園を陰険な山の頂きに置いた。しかし Melville のタイピーは緑なす険しい山壁に囲まれた谷である。煉獄山を登る者は罪が浄化され次第に身軽になるが、*Typee* の主人公は反対に谷を目前にして恐ろしい予感に襲われる。それでは一体山中で何が起ったのであろうか。山中の天地創造来の闇の中には、主人公の「人間らしさを奪う」力があつた。その力が性「狡しき」主人公の本来の狡しさを奪うことで、彼は何らかの転身をしたのではないか。そしてそれは丁度 *Paradise Lost* 第 9 卷の、楽園に現われた Satan と蛇の関係ではないだろうか。Satan は自分の霊体を肉化するために蛇を選んだが、この時の蛇と同様のことが主人公の身に起きたという意味である。Milton の言葉を借りると、主人公はその身に“act intelligential”¹⁹⁾ を吹き込まれたのであり、これが不思議な脚の痛みの起源となる。彼は明らかに楽園に侵入する蛇、あるいは墮落し原罪を犯した者、また楽園を追放された Adam としての呪詛を受けてしまったのだ。彼は腐敗した世界を捨て、理想世界へ旅出した筈だったが、皮肉にも呪われた世界を表象する存在にされてしまったということになる。

III

呪詛を受けた己の実体はタイピー人から隠さなければならない。酋長 Mehevi が名を求めた時、Toby が本名を告げるのに対し、主人公が咄嗟に偽名を名乗るのはその象徴的行為であろう。多くの批評家が相矛盾するタイピー像を指摘したが、タイピー人は決してヤヌスの如く二つの顔を同時に持つわけではない。それは主人公の谷での呼称と、隠された本当の名前という二重性とパラレルで、ひとつは実際に見えるタイピー、ひとつは主人公の内心にのみ映ずるタイピーである。例えば名前の交換は“a ratification of good will and amity” (72) を意味し、タイピー人はその通り二人に馳走を振舞い、宿を与え歓迎を表わすが、Tommo (以後主人公のことをこの名で呼ぶ) の内心は、自分の置かれた立場を“fearful circumstances” (76) と見做す。内心に映ずるタイピー人とは次のように禍心を抱く蛮人である。

But what dependence could be placed upon the fickle passions which sway the bosom of a savage? His inconstancy and treachery are proverbial. Might it not

be that beneath these fair appearances the islanders covered some perfidious design, and that their friendly reception of us might only precede some horrible catastrophe? (76)

対象を appearance と隠された reality, すなわち虚像と実像で拘えようとするのが、逆に見る者自身の二面性を鏡のように映し出すことになる。外面で平静を装いつつ, Tommo の心は恐怖を募らせてゆくからである。怖れの行きつく先は, カニバリズムの犠牲者になるかも知れぬことだが, 内心に巢食うこの死の脅迫から逃れたく, 谷を脱出したいと繰り返し切望する。山中で享けた脚の痛みが起きるのは, 決ってこういう時である。この間の彼は駈立てられるように絶望の深みへ落ちてゆく。Toby が谷を去ると, “almost despair” (99) に陥り, 次に友が最早戻らないと解ると, “a victim to despair” (109) となってしまう。絶望が最も深くなるというより, 絶望が頂点に達する時と言う方が適当なのだが, それは Tommo が海岸へ近づくことを, Mehevi たちが厳しく禁じたことによる。禁止の真の理由と, その象徴的意味は, 作品の最終で解ける「謎」なのであるが, Tommo には自分が谷の “a captive” (119) になった証拠と思える。彼にとっては最悪の運命が確認されることを意味する。

主人公の暗い心情は, 谷での最初の一カ月を語る時, 何度も愁訴されるが, その絶望感にはどこか深刻さが欠けるのである。ひとつには片脚の不自由な彼に, 片脚だった Pedro の姿が重なるところから生ずるユーモアがある。更に言うと Pedro が船長のカニバリズムの犠牲になることで脱走が可能となったが, 気が付くと彼自身が同じ筈に落ちているというアイロニーが深刻さを削いでいる。しかしそれよりも, 彼には蛇, 理知, 偽名などの印が付けられたことからして, 恐ろしい谷というイメージは外的に根拠を持つものでなく, 一種の錯覚であるらしいこと, すなわち “act intelligential” の成せる業であるというのが理由である。絶望の餌食になったのは, 他でもなく彼の “mind” (118) であって, タイピー人に対する不信感の源は, たとえ彼らが親切で丁重であろうとも, 結局は人食い人種でしかないという Tommo の “knowledge” (118) なのだ。これを通して谷を見るから, 恐怖を対象に投げかけ, 結果, 見る者自身が明かるい谷に鮮やかな黒い影を落してしまう。Melville は知識が物事の真の姿を見る妨げとなり, 不信感を生じ, 不幸を招来することを示すことで, 知性や理性の働きに内在する檻を解き明かす。Tommo の脚の痛みは, “act intelligential” の具体的作用の表象であって, 谷の医者が癒すことはもとより不可能な傷みである。タイピー人の眼からすると, 彼の脚には, 谷に存在しない “demon” (80) が棲んでいるからである。

IV

Tommo の心情を離れて観察されるタイピーを描く中に, Melville は主人公とタイピー人との新たな関係の物語を, 潜かに展開してゆく。名前の交換を端とした最初の数日間の出来事は, 実は主人公の死と再生が成就する一連の象徴的事件なのではあるまいか。「潜かに」語る

というのは、これは当人に意識されずに起る現象で、未だ彼の体験となっていないからだ。現象というのは、山中を出て谷に降り立ったことで、主人公は死の世界を脱して甦り、谷で Tommo という名で誕生した、ということの意味する。人々が熱狂的な好意で喜びを表わし、まず彼を “an infant” (88) として扱ったのはその理由による。Kory-Kory は紛れもなく、“a doting mother” (85) のように振舞い、主人公が赤子であるかのように食事をさせ、あやして眠らせることになる。翌朝、小川へ連れてゆくと、水中に身体全体を浸す (immerse (89)) よう言いつける。これで谷での baptism は完了した。幼年期を終え、成人となる段階が次に続くが、それは Mehevi の招待を受け Tommo が森の近くの酋長の館へと、槍を杖にして出かけることが、それを示す出来事となろう。森は周囲から暗くその深部を隠し、異教徒を異教徒たらしめる秘儀が行われる聖なる場所の象徴である。ここに入るのはその集団に属する者だけで、しかもタイピーの “Taboo groves” (91) は、女性には禁じられた男性だけの聖域である。館がこの森の傍に存ること、そこに至る道筋で数多くの障害に遭遇することは、館へ到達する過程こそ一人前の異教徒となるべく試練であり、通過儀礼であることを意味するのではないか。この一連の儀式的行為は、後の森で催される祭りへの参加、そして更には Tattooing へと連なっていく。

タイピー社会と Tommo との新しい関係は以上のように始まっているのだが、主人公はそのことを認知していないため、人々の親切な行為が理解できない “singular conduct” (120) としか思えないことになる。これが谷における最初の一カ月の状況であった。それでは主人公がタイピー人の視点に立ってタイピーを語るためには、どうすればよいか。それには彼自身の変化が必要で、そのためには脚に棲む “demon” を追い払うことが条件となる。17章の最初のパラグラフは主人公の変化を示す重要なところである。

Day after day wore on, and still there was no perceptible change in the conduct of the islanders towards me. Gradually I lost all knowledge of the regular recurrence of the days of the week, and sunk insensibly into that kind of apathy which ensues after some violent outbreak of despair. My limb suddenly healed, the swelling went down, the pain subsided, and I had every reason to suppose I should soon completely recover from the affliction that had so long tormented me. (123)

主人公とタイピーを隔っていたのは、時であったということになる。時の経過とは文明社会では進歩と知識の増大を意味する。生成発展が時によって計られるからだ。従って進歩の道を一步も踏み出さず、永遠の過去に留まっている社会に入るためには、時を刻むことを止め、過去及び未来を忘れ、歴史感覚を失うことが条件となろう。Melville は時の知識を文明人の identity とし、それを主人公から奪うことで、タイピー社会の内側に入らせたことになる。すると、例の脚の痛みも消えてしまったのである。ここで主人公の心情は一転し、タイピーは “Happy

Valley'”(124)、文明社会は“a world of care and anxiety”となる。この瞬間に Tommo の身に起きたのは、Milton の Adam とは丁度反対の方向の変化で、つまり“Bad fruit of knowledge”を失うことで、“good”を得たということになる²⁰⁾。以後二カ月ほどの主人公は疑うべくもなく、美しい娘 Fayaway と一緒に、無垢なる Adam である。主人公の旅は、ここでやっと目的地に達し、死と再生を体験するに至る。

タイビーという楽園を Melville は主人公の眼を通してどう描いたのだろうか。ここはまず豊かな自然の恵みの地で、人が汗して働くことはなく、人々の間には心配も悲しみも存在せず、絶えることなく陽気な気分と幸福感が漲っているのがその基調と言えよう。具体的な特長の第一は、人々の健康で美しい肉体とその生命感で、谷に病気はなく、死者を見ることもなく、埋葬場所さえ見当らない。次の特長は、文明社会には見られない調和のとれた円滑な社会が実現している点である。この特長を支える理由として Melville が考えるのは、人間本来には徳の大原則が具っていること、そしてタイビーではこの本来の美徳が日常生活で示されていることである。大原則とは、“perception of what is *just* and *noble*”(201)であると彼は言う。またタイビーの一般的性格のうち、最も賛えられるべきとして指摘されるのが、“unanimity of feeling”(203)であることは、特に注目しておかねばならない。なぜならこの点が後のタイビー人の変化の指標となるからである。今の谷には意見の相違も有り得ず、従って争いもなく、万事は親しさと協調精神でとり行われていることが強調される。このように語られるタイビーは、Rousseau が言う「世界の青年期」の具体的なイメージと言ってよいだろう。すなわち人間が「自然によって、けだものの愚昧さと社会の忌まわしい知識とから同じくらい離れた地点」にあって、「もっとも幸福でもっとも永続的な時期」、そして「人間にとって最良の状態であった」最初の小型社会である²¹⁾。Lawrence の言う通り、タイビー人は Mehevi に代表されるように、“Rousseau's Child of Nature and Châteaubriand's Noble Savage”²²⁾である。

対する文明社会は、Dolly 号で表わされたように著しく対照をなし、数世紀の進歩を経、飽くなき欲望を追い求めて、さまざまな便宜を生んだが、同時に無数の悪を併せ持つ。その上残酷な刑罰とか戦争における死の兵器が示す“fiend-like skill”(125)は、白人文明人こそこの世で最も残忍な生きものであると証明すると主人公は述べる。二つの世界をこのように対比することで、Melville は連続して成長する文明社会の価値といったものを、どの点からも肯定しようとはしない。知性や理性による人類の変化を不幸と見做しても、輝かしい進歩または必然とも考えない。なぜならタイビー人は文明人に比べると“a less intellectual existence”(124)であるが、彼らには文明の知識や技術を求める本来的な欲望といったものは全くないからである。彼らは欠ける所のない満足と、完全なる幸福の世界の住民として、Melville は描いている。

タイビーに文明が接することの意味は極めて明白である。文明が伝えるものが谷に存在しない悪や病、そして腐敗ならば、文明こそ「死」をもたらす「禁断の実」に他ならない。三方を険しい山で囲まれた谷にとって残る一方の海岸は文明の侵入する通路であり、此所こそ諸悪

の入り口、無垢なる Adam を誘惑し墮落させる災いの根となろう。従って、Tommo が海岸へ近づく行為そのものが、タイピー人にとっての墮落の象徴的行為となる。作中の謎はここに帰着する。Tommo に敵しい禁止が下ったのは、谷の Adam としての彼の行為は谷の住民の代替行為であって、その結果の呪いを受けるのはタイピー人自身であるからだ。楽園の喪失はこうして予感される。それを成し遂げるのは、勿論 Tommo である。

V

次なる役割のため主人公は再び転身をする。入墨を谷の宗教と結びつけたもの (“a religious observance” (220)) と見做すことで²³⁾、Melville は主人公を神話的世界と現実的世界の狭間に立たせ、明確な選択を迫ったことになる。入墨を入れること、特に鳥の習わしである顔に入墨をすることは、主人公が永遠に文明社会へ回帰することが不可能になることを意味するからである。入墨を強く勧められたことを契機にし、無垢なる Adam は儚い夢の如く消え、そこには “act intelligential” に冒されたものの Tommo が、過去、現在、未来という時の流れを取り戻し、その中に目覚めてゆく (“I had now been three months in their valley, as nearly as I could estimate.” (231))。同時に脱出への渴望、囚れの身としての嘆き、タイピー人の野蛮な振舞いに対する不安と恐れが、激しい脚の痛みと共に甦る。彼の眼には最早美德に包まれた人々の高貴なる姿はその痕跡をも留めず、見えるのは忌わしい行為をするに違いないと思われる身窄らしい蛮人の群れでしかない。

既に墮落している Adam が、次に蛇の役割を果たすのは時間の問題であった。谷を脱出したいという “real design” (247) を隠し、別の口実を設けると、人々の強い反対を押し切りながら彼は海岸へ近づいて行く。その道程で、タイピーが無垢なる者としての特質を喪失する証が顕われる。それは「感情及び意見の相違」と言える新しい現象で、タイピー賞賛の第一に挙げられた特質はついに消え失せ、Milton の Adam と Eve が墮落のあと初めて互いを非難し責め合ったように、タイピー人も初めて意見を異にし口論を始める。主人公にとってそれが “unspeakable delight” (248) であることが、彼自身の証となろう。タイピー人は仲間うちで流血の争いをも展開するが、主人公の象徴的行為を決定的にするのは、無事に捕鯨船のボートに乗った時、タイピー人が嫌悪して拒絶した文明の品々を、“Deed of Gift” (250) として彼らに投げ与えたことである。Melville はこうして主人公 Tommo に任務を果たせさせ、その上主人公とタイピー人の間に “enmity”²⁴⁾ を置いたため、終いにはタイピー人のひとり、Mow-Mow と、Tommo の死闘が始まる。主人公は白人文明人が最も残忍な生きものであると自から言った通りの行動を示し、一方 Mow-Mow は凶器を口に挟み、かつてタイピー人が呈したことのない “ferocious expression” (252) を顔に浮かべる。楽園の高貴なる野蛮人の姿は無くなってしまった。

Marheyo という人物は、主人公が谷で共に暮らした一家の父親で、心やさしくしかも風

変りな行動をする毫碌した老人である。例えば彼は永久に出来上りそうもない家造りに励んだり、昼夜の区別なく行動したりする。またある時は Tommo の履き潰した靴を得意そうに首からぶら下げたりもする。脱出真際の Tommo に示したこの老人の次の行為に、物語の最後の意味が託されているのではなからうか。

In the midst of this tumult old Marheyo came to my side, and I shall never forget the benevolent expression of his countenance. He placed his arm upon my shoulder, and emphatically pronounced the only two English words I had taught him—“Home” and “Mother.” I at once understood what he meant, and eagerly expressed my thanks to him. (248)

“Home”と“Mother”が何を意味するかについては重層する幾つかの考えを別出できる。まず、Tommo には帰り着きたい所と同義で、老人のみがそのことを理解したことになる。次に老人が一家の父親であったことから推すと、故郷を離れようとする「息子」にタイプーを指し示したとも充分考えられる²⁵⁾。しかし作品全体の流れの中では、此所タイプーこそ人間の故郷であり母であったという作者の明白な表示である。老人がその事を意味するつもりで言ったとは思われにくい、もしそうであるなら、彼は何かの異常な能力でそのことを知っていることになる²⁶⁾。Tommo が本当に「理解」したかどうかは不明である。

現代から人類の過去への、現実から神話的世界への旅はこうして終る。タイプーという生命溢れる楽園で、存在しない死の影に脅かされる主人公に、人間の理性や知性の翳と、それによる墮落の証左を Melville は示した。また主人公の侵入によって惹起されたタイプーの変貌は、失楽園の寓話が南海の島をエデンとして再現されたことを意味する。Typee は楽園喪失を以上のように二重に語るのである。主人公の転身はこれら全体を伝えんがための作者の仕掛けと言えよう。最後に主人公は再び捕鯨船に乗り込むが、彼の旅は一周りして振り出しに戻る。その軌跡は閉じられて円環を成すと、次なる循環の動作を喚起する。すなわち、一水夫に帰ると彼は再び生命感を失った世界に失望し、文明に未だ冒されない無垢なる人々の住む新たな楽園に憧れ、同じく転身しながら神話的世界へ出かけるだろうという予感を残すのである。Melville は人類の墮落の認識と、無垢への憧れをこうして彼の処女作のテーマとした。

注

- 1) テキストは Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life*, ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston, Ill.: Northwestern Univ. Press, 1968) による。同書からの引用はページ数のみを本文中にする。出版当時の事情については、Jay Leyda, *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville, 1819-1891* (1951; rpt. New York: Gordian Press, 1969), I; Leon Howard, *Herman Melville: A Biography* (Berkeley: Univ. of California Press, 1951); 及びテキストに付された Leon Howard, “Historical Note” を参考にした。
- 2) Charles Roberts Anderson, *Melville in the South Seas* (New York: Columbia Univ. Press, 1939), pp. 117-95.

- 3) Milton R. Stern, *The Fine Hammered Steel of Herman Melville* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1957), p. 34.
- 4) Unsigned review by John Sullivan Dwight, *Harbinger*, II (April 4, 1846), rpt. in *Melville: The Critical Heritage*, ed. Watson G. Branch (London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1974), p. 74.
- 5) Unsigned notice by Nathaniel Hawthorne, *Salem Advertiser* (March 25, 1846), rpt. in *Melville: The Critical Heritage*, p. 67.
- 6) Lewis Mumford, *Herman Melville* (New York: Hartcourt, Brace & Company, 1929), p. 72.
- 7) 例えば William Ellery Sedgwick は *Herman Melville: The Tragedy of Mind* (1944; rpt. New York: Russell & Russell, 1962) p. 20 に “the narrative climax is deeply at odds with a great part of the book” と述べている。
- 8) D. H. Lawrence, “Herman Melville’s *Typee* and *Omoo*,” in *Studies in Classic American Literature* (1920; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1971), p. 145.
- 9) F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (New York and London: Oxford Univ. Press, 1941), p. 288.
- 10) Stern, p. 44.
- 11) Richard Ruland, “Melville and the Fortunate Fall: *Typee* as Eden,” *Nineteenth Century Fiction*, 23: 3 (1968), 312-23 参照。この流れに沿った論文として他に次のようなものが挙げられる。Sedgwick, pp. 19-36; Richard Chase, *Herman Melville: A Critical Study* (1949; rpt. New York: Hafner, 1971), pp. 9-15; Newton Arvin, *Herman Melville* (1950; rpt. Westport: Greenwood Press, 1972), pp. 77-88; Faith Pullin, “Melville’s *Typee*: The Failure of Eden,” in *New Perspectives on Melville*, ed. Faith Pullin (Edinburgh: Univ. Press, 1978), pp. 1-28; John Wenke, “Melville’s *Typee*: A Tale of Two Worlds” in *Critical Essays on Herman Melville’s Typee*, ed. Milton Stern (Boston: G. K. Hall & Co., 1982), pp. 250-58. 中でも Stern, pp. 29-65 が最も深く詳細であると思われる。
- 12) Thomas J. Scorza, “Tragedy in the State of Nature: Melville’s *Typee*,” *Interpretation*, 8, No. 1 (January, 1979), pp. 103-20. この論文からは多くの示唆を受けた。
- 13) Willam B. Dillingham, *An Artist in the Rigging: The Early Work of Herman Melville* (Athens: Univ. of Georgia Press, 1972), pp. 9-30.
- 14) *Typee* 作中に直接 Rousseau についての言及がある。(p. 12) 外に執筆時までに Rousseau を読んだ確証はなく、外的に確められるのは、Leyda, p. 348 によると 1849年12月15日、本屋で “the much desired copy of Rousseau’s *Confessions*” を手に入れたと書き残している点である。しかし Anderson は *Melville in the South Seas*, p. 178 で Melville は執筆時既に長期にわたり、熱心に Rousseau を読んでいたと推定されると言う。
- 15) Scorza, pp. 112-14 参照。Rousseau の自然人とタイビー人の一致点が指摘されている。
- 16) Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur l’origine et les fondements de l’inégalité parmi les hommes* (Paris: Aubier-Montaigne, 1973), p. 118. 尚本書に関しては、Roger D. and Judith R. Masters, trans., “Discourse on the Origin and Foundations of Inequality Among Men,” in *The First and Second Discourses*, ed. Roger D. Masters (New York: St. Martin’s Press, 1964) を参考にした。
- 17) Scorza, pp. 104-105.
- 18) Melville, *Typee*, p. xiv, pp. 6-7 and 195-99 参照。“There is something decidedly wrong in the practical operations of the Sandwich Islands Mission.” (p. 198).
- 19) John Milton, “Paradise Lost,” in *Milton: Poetical Works*, ed. Douglas Bush (London: Oxford Univ. Press, 1966), bk. IX, 1. 190 (p. 375).
- 20) *Ibid.*, bk. IX, 11. 1070-73 (p. 395) に “...since our eyes/Opened we find indeed, and find we know/ Both good and evil, good lost and evil got, / Bad fruit of knowledge, if this be to know, / ...” とある。

- 21) Rousseau, pp. 100-101. 邦訳は本田喜代治, 平岡 昇訳『人間不平等起原論』(岩波文庫, 1933) を使わせていただいた。
- 22) Lawrence, p. 143.
- 23) Anderson は *Melville in the South Seas*, pp. 149-51 で入墨は宗教的なものではなく, Melville の誤解であると言う。
- 24) Genesis 3. 15.
- 25) Dillingham, pp. 19-20. Tommo はまた谷を去ったあとで, 谷にノスタルジアを感じ, 一種の故郷と思ったのではないかというのが Dillingham の論である。本稿とは異なる解釈ではあるが“Home”と“Mother”をタイプーと結びつけたのは彼だけである。
- 26) 作中タイプー人が英語を発することは皆無で, ここで筆触した老人が教えられたとはいえ, 外国語を発音すること自体が「異常」と言えよう。*Moby Dick* の Pip を思い出させる。